

# 田原地域に適した飼料用米専用品種の検討

～飼料用稲「べこあおば」の栽培特性把握～

浅井さくら（東三河農林水産事務所田原農業改良普及課）

【平成30年2月22日掲載】

## 【要約】

田原地域に適した飼料用米専用品種を検討するため、「べこあおば」と慣行品種の「夢あおば」を比較したところ、「べこあおば」は「夢あおば」に比べ千粒重が約2割も重く、目標であった粗玄米重600kg/10aを達成した。5月中旬に移植すると、9月上旬に成熟期となり、用水の利用期間が8月末までに限定されている田原市の水利条件でも栽培が可能と考えられた。

## 1 はじめに

田原地域では、飼料用米専用の多収品種として「夢あおば」が栽培されている。さらに多収の品種を検討するため平成28年に「べこあおば」を試作したところ、高い収量性が認められた。そこで、粗玄米重600kg/10aを目標に、「べこあおば」の本地域における適応性を検討した。併せて、田原地域では用水の利用期間が8月末までに限定されており、早生品種しか栽培できないため、品種の早晚性についても改めて確認した。

## 2 栽培概要と調査内容

### (1) 栽培概要

「べこあおば」は4月13日に播種、5月14日に移植、慣行品種の「夢あおば」は4月15日に播種、5月15日に移植を行った。両品種とも、栽植密度は15.6本/m<sup>2</sup>、肥料は「側条エース（コシヒカリ用）」を10aあたり60kg（窒素14.4kg、リン酸7.8kg、カリ6.0kg）施用した。

### (2) 調査内容

出穂期、成熟期、倒伏程度を目視で確認した。また、稈長、穂長、穂数は、成熟期に入った8月31日に各10株を測定し、穂数はm<sup>2</sup>あたりに換算した。精玄米重は、坪刈りにより求め、10aあたりに換算した。調査は1品種あたり2反復で行った。

## 3 結果

### (1) 生育調査

「べこあおば」は、「夢あおば」より出穂期が2日遅く、成熟期は4日遅かった。成熟期の稈長は約8cm短く、穂数は単位面積当たり20本少なかった。倒伏は両品種ともなかった（表1）。

なお、「夢あおば」は登熟期の後半で、葉先が赤くなる症状がみられたが、「べこあおば」はみられなかった。

表1 生育調査結果

品種	出穂期	成熟期	稈長	穂長	穂数	倒伏程度
			cm	cm	本/m <sup>2</sup>	
べこあおば	7月27日	9月8日	62.2	19.2	315	無
夢あおば	7月25日	9月4日	70.5	22.3	335	無

## (2) 収量調査

「べこあおば」は、目標であった粗玄米重600kg/10aを達成した。また、「べこあおば」は「夢あおば」より千粒重が約2割も重く、一粒が大きかった（表2）。

表2 収量調査結果

品種	粗玄米重	千粒重
	kg/10a	g
べこあおば	600.4	29.8
夢あおば	546.2	25.0

## 4 考察

### (1) 生育及び収量性

「べこあおば」の粗玄米重は、同じ施肥条件で栽培した「夢あおば」より54.2kg/10a多収で、「べこあおば」は「夢あおば」より収量性が優れると考えられた。

また、飼料用米は多肥栽培されることが多く、倒伏の発生が問題となっている。「べこあおば」の稈長は、同じ施肥条件で栽培した「夢あおば」より短い。このため耐倒伏性は優れていると考えられた。

収量調査において、品種による差が顕著に現れたのは千粒重で、「べこあおば」の千粒重は、「夢あおば」より4.8g重かった。千粒重は登熟期間の光合成能力により左右されることから、「べこあおば」は生育後半まで光合成能力が維持されていると思われた。

### (2) 早晩性

「べこあおば」は「夢あおば」より出穂期及び成熟期が数日遅かったが、5月中旬に移植すると、9月上旬に成熟期となり、用水の利用期間が8月末までに限定されている田原市の水利条件でも栽培が可能と考えられた。